

第1分科会

日時：12月13日(土) 14:40~16:20

会場：みえ県民交流センター イベント情報コーナー

先駆者と語ろう～10年継続するNPO法人の極意～ NPO法人設立・運営の悩みや課題

■概要

私たちは、NPO活動を取り巻く様々な課題や困難に直面しながら日々活動しています。NPO法が施行されて10年。これまで活動を続けられてきた先輩NPOは、どのように苦難を乗り越えてこられたのでしょうか。先輩方の経験に学び、課題解決へのヒントを得て、これからのNPOは、どのように行動していくべきなのかを一緒に考えます。

■タイムテーブル

14:40～14:40	1分	趣旨説明
14:40～15:10	30分	活動紹介 ①NPO法人赤目の里山を育てる会 ②NPO法人市民福祉ネットワークみえ ③NPO法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター
15:10～16:05	55分	ディスカッション「10年継続するNPO法人の極意」
16:05～16:20	15分	メッセージ

■出演者プロフィール

伊井野雄二 (いの ゆうじ) NPO法人赤目の里山を育てる会理事長

鳥取県生まれ。日本福祉大学II部社会福祉学部を卒業後、赤目養生診療所事務長、赤目カントリークラブ建設反対市民の会事務局長を歴任する。1996年に赤目の里山を育てる会事務局長に就任し、1999年には、法人格を取得し、三重県のNPO法人認証第1号となる。同年、(有)エコリゾート代表取締役に就任、2003年には、通所介護施設デイサービス赤目の森を立ち上げる。里山の保全と育成を訴える「里山の伝道師」として活躍中。現在、社団法人日本ナショナル・トラスト協会理事、名張市赤目小学校非常勤講師ほか。著書に「里山の伝道師」、「成人病に克つ86」。

大西 良太 (おにし りょうた) NPO法人市民福祉ネットワークみえ理事長

三重県浜島町(現在の志摩市)生まれ。雑誌編集部記者を5年、商社勤務10年を経て、1989年に伊勢まごころを立ち上げ、助け合いの精神に基づいた福祉サービスを始める。1999年5月にNPO法人格取得。困ったときはお互い様をモットーに、24時間365日、高齢者、障害者にサービスを提供する一方で、1997年に在宅福祉ネットワーク三重を設立。2003年にNPO法人市民福祉ネットワークみえとしてNPO法人格を取得し理事長に就任する。三重県社会福祉協議会評議員、法務省人権擁護委員、NPO法人全国市民福祉団体全国協議会理事、NPO法人全国移動ネットワークサービス理事ほか。

野口あゆみ (のぐち あゆみ) NPO法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター事務局長

三重県伊勢市生まれ。高校卒業後、地元タウン情報誌「しんぶる」編集部を4年勤めたあと、実家の花屋を手伝いながら夜は姉が経営するワインバーでアルバイト。その合間を縫って、フリーライターとしてタウン誌やJTB旅の情報誌「るるぶ」などにも執筆。2000年3月に現在夫のチェアウォーカー青年との出会いをきっかけに「伊勢・鳥羽・志摩ガイド おでかけチェアウォーカー」発行発起人として、バリアフリー活動を始める。2002年に三重県の特異プロジェクトである「伊勢志摩再生プロジェクト」事業の一環として立ち上げた伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの事務局長に就任。現在鳥羽駅前ビルの1階に事務所を構えるツアーセンターにてお客様の対応、伊勢志摩のバリアフリー観光の促進とPR活動をおこなう。

■進行役プロフィール

山本 康史 (やまもと やすし) ハローボランティア・ネットワークみえ
オープニング「三重県のこれまで」参照。

NPO法人赤目の里山を育てる会について

1. 1 設立のきっかけと目的

日本における身近な自然「里山」は、1960年を契機にエネルギー転換のために、それまで薪炭に依存してきた燃料が、石油化石燃料に転換したために、経済的な価値を失ったエリアであった。そのため、不要となったその場所は、住宅需要やレジャー需要を実現するために、住宅開発や大規模娯楽施設などの開発が進んできた。しかし、それから30年、40年の経過の中で、大都市住民の中で、少なくなった身近な自然や豊かな自然環境に関心が集まり、またリラ



手入れをした赤目の里山

ックスするための貴重な憩いの場所としての再評価が起こり、そのような場所を残していこう、活用していこうという取り組みが盛んになってきた。

このような中で、本会の前身の住民団体は、三重県名張市の南西部丘陵地で起こったゴルフ場開発のオルタナティブとしての「エコリゾート計画」を提案、実現して11年を迎える。この計画は、「エコリゾート赤目の森」という環境保全型宿泊施設を有限会社で作ったものである。50名位の宿泊できる小さな施設の一部に、本会が発足した7年前に、事務局を置き活動の中心をつくることのできた。

この「エコリゾート赤目の森」の建設実現の取り組みは、日本で初めて大規模開発へのオルタナティブ事業として注目を浴びた。なぜなら、それまでの環境保護運動においては、計画に「賛成」か「反対」しかなかった。そんな中で、こんな計画はどうか、という「対案」を突きつけて実現していったのだった。当時ゴルフ場を巡るいろいろな問題が「社会問題化」した時期で、ゴルフ場が抱えている問題を多くの人たちが認識し始めた時期であったが、それでも「ただ同然」の土地が「何倍にもなる」チャンスに里山の所有者たちは大きく期待した。それは、里山という山林を持っているといっても、面積はなほだ少ない状況で、少ない面積でありながら維持管理する若い人が都会へ行ってしまう管理ができない、仮に山の本木を立派にしても採算が合わないなどの三重苦に苦しんでいる状況を狙った計画だったからであった。



このような状況で、簡単に「賛成」「反対」の二者択一の選択肢では、地域に無用の混乱と誤解を生じることになることを危惧した「ゴルフ場建設反対」の住民グループは、小さいながら「旅館業」が行える施設を建設し、そこで地元の人たちの雇用を生み出し、その施設を地元と大都市に住む人たちの交流の場として、「里山」という自然を大切に保全

しながら、自らの健康と精神を「癒す」ことができるような「エコロジカル・リゾート」を作ろうという計画を提起して、短期間に実現したのだった。それが、1992年に完成開業した「エコリゾート赤目の森」である。

ゴルフ場計画はバブル崩壊と住民たちの反対運動、エコリゾート赤目の森建設運動などで93年に白紙となったが、「オルタナティブ」の取り組みは、事業を推し進めることが最も大切な重要であるのはもちろんだったが、利用者を獲得するのは反対運動を行なうより大変だった。それから、利用者をいかに獲得するのかということにまい進した「エコリゾート赤目の森」には、名前が知れて多くの利用者が訪れるようになった。温泉もない、何処にでもあるような自然ばかりしかない、そんな施設にそれなりの多くの人たちが来るようになった。



子どもキャンプに集まった地元の小学生達

ほっとするようになった95年の春、またぞろこの里山に、産業廃棄物処理場の建設計画が発覚したのだった。突然斜面の木々たちの伐採が始まり、驚いた住民たちは、この真相を調べ、そのような計画があることを突き止めて、すぐに反対運動を組織したのだった。この取り組みには、エコリゾート赤目の森がある地区の人たちが熱心で、「産廃場はあかん」ということだった。

個人所有の土地をどのようにしようが、他人がどうのこうのとは言えない中で、全国では、イギリスで100年前に起こった「ナショナル・トラスト運動」が、注目され始めた時期だった。知床や天神崎、鎌倉などの取り組みは、残したい自然や施設を、市民の一人ひとりの小さな浄財を集めて買い取る運動であった。この運動に学んで、赤目でも里山を残していこうということになったのであった。1996年2月、受身の環境保護では里山を守れないと土地の買取を会の大きな使命として、赤目の里山を育てる会が発足したのだった。



希少種の「カワバタモロコ」が住むトンボ池

1. 2 活動の実績

30名くらいの人たちで発足した会は、大都市住民の支持を得て、すぐに200名を超える会へと成長し、次の年には第一号の「ナショナル・

トラスト・プロパティ」(トラスト地)を所有するまでになっていった。エコリゾート

赤目の森近くの里山を賃貸して、トンボ池やトムソーヤ広場の建設、里道の整備、自然観察会、伐採木を使った「シイタケオーナー」の募集など、本会の取組みは全国のナショナル・トラスト団体との交流（1996年4月に

社団法人日本ナショナル・トラスト協会団体加入）により、飛躍的な事業の展開となり、里山の整備が急速に進展したのだった。

1997年10月には、ナショナル・トラスト全国大会のエキスカージョン会場になり、98年には「里山シンポジウム」開催、里山ガイドブック製作、地元赤目小学校の里山自然散策授業の開始、99年には三重県で第一号のNPO

法人の認証を得て、行政との協働事業も始まった。2000年には、三重県の環境功労賞、2002年にはまちづくり賞を受賞した。2005年には里山の保全、希少種のカワバタモロコの保護育成に努めたことが評価されて、自然保護功労賞環境大臣表彰を受賞して、現在にいたっている。

また、里山の保全を進めるためには、一人でも多くの現場で頑張ってもらえる人たちを養成しながら、里山の自然の仕組みを理解してもらい、里山の意義や重要性、里山の心地よさを学んでもらうような講座をはじめることが重要だという認識になり、2000年の4月に初めて「里山保全人材養成講座」（基礎編）を開講した。翌年の2001年に「里山保全人材育成講座」（実践編）も開講したが、予想を越える20名以上の方々の受講希望があり、今日的ニーズをキャッチした瞬間だと大いに喜んだ。

2002年には、学校の週休2日制が始まり、子どもたちの休みの時間を有効に活用する場を提案する必要と、男性だけでなく女性も里山について、勉強してもらう必要があるという認識と、実践編を勉強した人たちに、リーダーになって地域で頑張ってもらえるような講座の必要性から、それぞれ「子ども里山探検隊」「里山レディース講座」「里山リーダー養成講座」の三講座を開講し、多くの受講生を獲得して講座は行われていて現在に至っている。

また、2002年の12月には、三重県より介護保険法による通所介護サービス施設「デイサービス赤目の森」をエコリゾート赤目の森に併設して、里山の総合的な活用の一貫として、「癒し」の事業化も行うことになってきている。

また、近年では木質バイオマスエネルギーの有効利用の独自研究の中で、最小のペレタイザーを共同開発して、全国規模での関心を呼んでいる。



デイサービス赤目の森の運動会



世界でも最小クラスのペレタイザー

(特) 赤目の里山を育てる会 歴史と顕彰 2008. 11.01 現在

団体名 特定非営利活動法人 赤目の里山を育てる会 理事長 伊井野 雄二

所在地 〒518 0762 三重県名張市上三谷268 1

会員数 105名 設立年月日 平成8年2月12日

団体概要 名張市南部丘陵地通称「赤目の里山」を大規模開発から、守り育てるために任意環境保護団体の赤目の里山を育てる会を設立した。里山の保全 里道の確保 トムソ ヤの小屋 トンボ池の管理などの環境保全活動をはじめ、里山リ ダ 養成講座 里山レディ ス講座 子ども里山探検隊などの実施 赤目小学校との里山自然体験授業を長年にわたって実施。通所介護サ ビス事業を行い、全国に先駆けて、その利用者に里山の自然を提供している。

主な経歴

- (1) 平成9年2月東海地方で第1号のナショナル・トラスト地を所有した。
- (2) 平成9年10月第15回ナショナル・トラスト全国大会のエクスカ ション会場となる。
- (3) 平成10年4月名張市赤目小学校定期里山自然散策始まり現在も10年目が実施されている。
- (4) 平成10年4月三重県第1号のNPO法人の認証を受ける
- (5) 平成11年8月国際ワ クキャンプ始まり、現在も夏・冬 年2回の完全実施が続いている。
- (6) 平成12年4月三重県環境功労賞受賞
- (7) 平成12年9月日本ナショナルトラスト協会第1回「エ コンプロジェクトジャパン」実施
- (8) 平成13年4月里山リ ダ 養成講座開設 現在も行われている。
- (9) 平成14年11月(財)あしたの日本を創る協会 まちづくり賞主催者賞受賞
- (10) 平成15年1月 通所介護施設「デイサ ビス赤目の森」開設
- (11) 平成15年9月 経済産業省第1回市民ベンチャ 事業「里山総合講座開設事業」採択
- (12) 平成15年11月中部の未来創造大賞 優秀賞 受賞
- (13) 平成17年4月 自然保護功労賞 環境大臣表彰 受賞

主な功績

1. 1990年代初めから、全国に先駆けて里山の保全活動を様々な取組みで行い、大規模開発をオルタナティブな手法で阻止。全国の見本となった。
 - I ナショナル・トラスト運動を中心に据えて、多くの人たちから支持を得て買取りを進めて保全した。現在は、買取り面積2筆で4000平方メ トル 借地で20ヘクタ ルその里山の除伐採を行い、萌芽更新の促進を行っている。
 - II 里山の里道を保全の中心に据えて、里道の荒廃を防ぐとともに、年間4 5回の草刈をおこない、延べ5キロの里道を歩けるような状態に保全してきた。休耕湿地田の有効活用を試行し、トンボ池を創設し、希少種である「カワバタモロコ」の繁殖育成をおこない、多大な成果を得ている。
 - III 里山の自然を介護事業に取り入れて、「デイサ ビス赤目の森」を運営。ユニ クな介護事業として注目されている。
 - IV 地元赤目小学校4年生の「里山自然体験散策授業」を実施して10年。同じ子どもが同じフィ ルドに年間4回訪れて、自然を体感する「原風景を心に染める」授業。同校には不登校児がいない。
 - V 伐採材の有効活用を模索し、「地産地消」のペレット生産などで、木質バイオマスなどの利用促進のためのモデル事業を行ってきた。

2. 活動に対する評価

10年以上の継続してきた取組みにより、名張市域のみでなく、東海 全国的にも活動が注目されている。それは、当会の活動を視察にこられる団体が多く、また地元大企業からの子どもエコクラブの協働開催の委託事業が実施出来ていることなどから、大きな関心と好意的な評価が寄せられていると考えている。季節ごとに行うイベントにも多数の市民が参加。

表彰歴	平成12年 4月	三重県環境功労賞受賞	長年の功績
	平成14年11月(財)あしたの日本を創る協会	まちづくり賞主催者賞受賞	里山保全の先駆
	平成15年11月	中部の未来創造大賞 優秀賞 受賞	里山での介護事業
	平成17年4月	自然保護功労賞 環境大臣表彰 受賞	里山での保全活動

NPO法人《市民福祉ネットワークみえ》の紹介

目的	三重県ならどこに住んでも安心して暮らせる福祉立県三重を市民サイドから目指す。
設立	1997年（平成9年）12月
会員数	現在 27 団体（増加傾向）県内南北各地域に点在
提携団体	（特）さわやか福祉財団、（特）市民福祉団体全国協議会、（特）地域創造ネットワークジャパン、（特）全国移動ネットワークジャパン
連携団体	連合三重、三重県社会福祉協議会、労働者福祉協議会、全労済三重県本部

組織

代表理事	大西良太	（特）伊勢まごころ
副代表理事	更谷令治	（特）おもいやり介護支援センターくまの
理事	渡部栄司	（高齢協）協和苑
理事	島崎春江	（特）おもいやり介護の会つくしんぼ
理事	田嶋和重	全労済三重県本部
理事	出口いつ子	（特）ウィミィ
理事	豊田秋次郎	（特）テトテ
理事	湯浅しおり	（特）あいあい
監事	中村良子	
事務局	山路秀雄	

注）（特）・・・特定非営利活動法人、（高齢協）・・・高齢者生活協同組合

※ フォーマル・インフォーマルサービスを含め県内千余名にサービスを提供

目 的

私たちの会の目的は、老いても病んでも安心して暮らせる地域社会の創造です。困ったときはお互い様を合言葉に助け合いの精神に基づき私たちの少しのお手伝いで利用者は自立あるいは安心して暮らすことができます。それが私たちのねらいです。そして誰もが高齢者になり、また障害者になる危険な隣で生活しております。誰もこのことから逃れることはできません。

活動内容

介護保険事業所と勘違いされがちですが、介護保険制度に基づくフォーマルサービスのみを提供している団体は当会にはいません。どの会も必ずインフォーマルサービス（保険外サービス）を提供しています。しかも、活動の軸足はしっかりとインフォーマルサービスに置いております。と言うのも、当会があるいは各々の団体が活動を始めたとき介護保険制度はありませんでした。そのような福祉環境の中で生活支援、介護サービスを提供し続けてきたのです。現在でも当然、私たちの団体の中には介護保険制度には敢えて参入せず助け合いの精神に基づき様々な介護サービスを提供している草の根団体もあります。介護保険制度が私たちの有償ボランティア活動に良しにせよ悪しきせよ多大な影響を与えたことは枚挙に遑はないが、前述の通りこれからも多くの団体は、インフォーマルサービスに軸足を置きつつフォーマルサービスも提供していきます。この姿勢は不変です。サービスの内容については利用者と協力者が決定します。オムツ交換だけをやっているわけではありません。ペンキ塗り、屋根の修理、庭の樹木の剪定、移動等多岐にわたります。当然ながら、健常者がこれらのサービスを利用することは出来ません。

サービス提供区域

現在、27団体が三重県内、北勢から東紀州までに点在しております。当初、県内の社協の数69をとりあえず目標ににしてきたのですが、市町村合併で社協が29になってしまい現在となっては、当会の会員（団体）数が社協の数を超えるのは時間の問題となりました。限りなく福祉系NPOを三重県内に立ち上げ、市民サイドから地域福祉の充実を図っていくのが私たちの活動です。

1. 情報提供事業

市民福祉の重大な仕事の柱の一つである市民福祉発の情報をより充実したかたちでタイムリーに流していきます。また情報は、迅速・正確を第一義に考えております。情報源としては、NPO法人市民福祉団体全国協議会、財団法人さわやか福祉財団、NPO法人全国移動ネットワークサービス、全国社会福祉協議会等から戴いております。情報によっては厚生労働省で協議された内容がその日の数時間後には市民福祉の会員のお手元に届いている場合もあります。現在困っていることは毎日情報数は結構あるのでその重要か否かの選択に困っています。本年度は情報の選択はある程度事業所で判断しますが可能な限り会員に情報を流し選択は会員にさせていただく方向でやっていきたいと思っております。

2. 福祉有償運送

現在、福祉有償運送および介護タクシー等の運転者講習は伊賀・北勢・中南勢に国土交通省認定の三つの認定講習団体があり新任研修等を実施しております。市民福祉は三つの認定講習団体の一つである三重県社会福祉協議会と連携し三重県の中南勢部を中心に講習を実施しております。この制度も県内の団体にはほぼ理解されるようになり本年度の受講生は減少するものと予想されます。最大の原因は経営的にペイしないことが最大の原因と思われまます。

福祉有償運送は全国的に見た場合、三重県は内容的に優れているとは言えませんが8ブロックに別れ運営協議会も正常に働き、制度としては全国でも指折のうまく制度が機能している県であります。この制度が順調に推移した最大の原因は市民福祉が県の方針に賛意を示し、協力したからにならないと自負しております。内容の不備、制度の不備については少しずつ改良していけばいいのかなと考えています。もし市民福祉がこの制度に協力体制をとらなかつたら三重県も隣の和歌山、奈良、滋賀と同様、運営協議会とは無縁の状態であつたらうことが想像できます。福祉有償運送はこれからの高齢社会を予測すると非常に重要な交通手段になるので制度に対する不満はさておき現実的に活動可能な制度に成長させていきたい。

3. NPO法人

活動実態の見直し。私たちは定款の中で活動の目的を謳っている訳ですがその目的におのおのの団体は近づいているかどうか検証する必要があります。自分たちの活動がNPO法人の理念に沿ったものかどうか、NPO法

人でなくとも実現可能な活動ならNPOである必要が無くむしろ営利法人で活動したほうが理にかなってはいないかどうか。介護保険上のサービスのみを提供している団体は法人格を変えるべきだろう。互助サービスを介護保険サービスを提供する呼び水に利用していないだろうか。返す返す検証をお願いしたい。NPO法人（非営利法人）のほうが介護保険の利用者に信頼を得やすいといった不届きな考えは即刻、洗い流さねばならない。新設団体の中にもNPO法人で活動する事業者が増えています。よく見ると介護保険上のサービスしか提供していません。本年度は、このような新設団体にも本来のNPOのあるべき姿の情報提供を行なっていきたい。

特定非営利活動法人

伊勢志摩

バリアフリー ツアーセンター



〒517-0011
三重県鳥羽市鳥羽1-2383-13
鳥羽一番街1F
TEL 0599-21-0550
FAX 0599-21-0585

http://www.barifuri.com
iseshima@barifuri.com
開局時間
(季節により変動あり)
am9:00~pm5:30
木曜定休

NPO法人 伊勢志摩バリアフリーツアーセンター って何しているところ？

障がい者、高齢者が『伊勢志摩へ行きたい!』と思ったとき、
行ける場所より、行きたいところへご案内!
「したい」旅行のお手伝いをしています。



■バリアフリー観光情報の収集発信

ホームページでの情報の提供。またメールや電話での問い合わせに、障がい者スタッフが丁寧にアドバイス。

■バリアフリー評価事業

宿泊施設、観光施設などのバリアフリー調査

■観光地のバリアフリー化

車椅子レンタル「どこでもチェア」運営
施設などをバリアフリー化するためのアドバイス

■モニターツアー・アクティビティなどのイベント

セーラビリティ伊勢活動(障がい者ヨット)

■その他

視察受け入れ(有料)・講演活動(有料)



恋に導かれた観光再生 ~奇跡のバリアフリー観光の誕生の秘密~

日本を動かした感動秘話がここに明かされる!
車イスの青年に恋した少女が、
青年に気に入られようと動くたびに奇跡が起きた。
人を動かし、町を動かし、行政を動かし、
とうとう国まで動き出す。

1. 出会い、小さな奇跡
2. 奇跡の始まり(NPOと三重県)
3. 伊勢志摩再生プロジェクト
4. 観光地の凋落はなぜ?
5. パソナルバリアフリー 基準
6. バリアフリー ツアー センタ の始動
7. 広がるバリアフリー
8. 切り開くバリアフリー
9. 工夫と人がつくるバリアフリー
10. 立ちほだかる壁
11. 新たなる奇跡



伊勢志摩バリアフリー ツアー センタ 理事長 中村 元 著
長崎出版 1,470円(税込)B版 全230ページ

《ご購入について》

各書店、又は伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの
ホームページを開いて、トップページ中央右のパナ
ーからもご購入できます。

<http://www.barifuri.com/>

平成19年5月6日、第62回
伊勢神宮式年遷宮お木曳(おきひき)行事の一日神領民の粋で、障がい者も参加できるバリアフリー お木曳を実施。当日はあいにくの雨でしたが当事者とたくさんの方のボランティアのみなさんが笑顔で無事奉曳(ほうえい)できました。また、今までなされなかった取り組みに様々な分野から注目を受けてきました。次回は平成25年の白石持にとに夢はふくらみます。



ぱりふりお木曳
大成功!

どこでもチェア! で快適旅行を



旅行中、ずっと車椅子をレンタルできるサービス。レンタル 感覚での利用を目指し、鳥羽市、伊勢志摩バリアフリー ツアー センタ、鳥羽旅館事業協同組合が協働で始めました。

現在鳥羽市内の6つのステーションにて車椅子の貸出、各旅館や観光施設にて車椅子の返却を受け付けています。